

トロイアの木馬に関する覚え書き

平山 晃司

I

トロイアの木馬が何を意味するかについては古来さまざまな解釈が試みられてきたが¹、それらの中で今なお最も輝きを放っていると思われるのは Burkert の所説である²。彼によれば、トロイアの木馬の物語は、クノーポスがエリュトライを攻略する際、テッサリアから助っ人として派遣された女祭司クリューサメーが行ったと伝えられるものと同種のスケープゴート儀礼を反映している。エノディア（ヘカテーの別名）に仕えるこの女祭司は、群れの中から選び出した雄牛の両角に金箔を貼り、その体をリボンと黄金の糸を織り込んだ紫色の布で飾り立てた後、狂気を惹き起こす作用を持つ薬を混ぜた餌を食わせた。そして敵軍の目の前に祭壇を設けて供犠を行うと見せかけ、狂った牛が逃げ出して敵の陣中に走り込むに任せた。これを吉兆と見たエリュトライの兵士らは雄牛を捕らえ、神々への犠牲に供してその肉を食べた。するとたちまち薬の効果が現れて彼らは全員狂気に陥り、飛び跳ねたり駆けずり回ったりし始め、次々に持ち場を離れてしまった。クノーポスはもはや防衛不能となった敵兵を皆殺しにし、かくしてエリュトライの町を手に入れた³。

災いを転移させたスケープゴートを送り込むことによって敵陣に破滅をもたらそうとするこのような儀礼がヒッタイトとインドにも存在したことを指摘した上で⁴、Burkert は言う。トロイアを壊滅させた「槍の馬」(δοῦριος ἵππος) は叙事詩の伝承の過程で体内に兵士を潜ませた「木馬⁵」へと変容したが、これは明らかに一つの合理化であり、クリューサメーの行った儀礼が功を奏したのは彼女が薬物を用いたためだとされていることもまた然りであると。

本稿は、この碩学の堅牢な立論に対してささやかな、あらずもがなの補強材を提供せんとするものである。

II

ギリシア軍の置き土産である巨大な木馬を前に、トロイア人たちはその処置の仕方について議論する。叙事詩の詩人たちが依拠した伝承には、この議論が

(A) 木馬を城塞の中に引き入れた後に行われるか、(B) その前に城壁の外で行われるかという点で相異なる二つの系統が存在するが、それぞれの系統に属する叙事詩同士の間にも、件の議論における意見の分かれ方に小さな異同が認められる。木馬をアテーナーへの奉納物として城内に安置する（あるいは引き入れる）ことに反対する人々の間で、これをいかに処分するかをめぐってさらに意見が二つに割れ、一方は断崖から突き落とせと言うのに対し、他方は (a) 刃物による破壊または (b) 焼却を提案するのである。『オデュッセイア』と『イーリオスの陥落』は同じ A の流れを汲む叙事詩であるが、前者は a の⁶、後者は b の話形を持つ⁷。トロイア人が木馬を町の中に引き入れる際、城壁の一部を壊したと語っている⁸ことから B の系統に属することが明らかな『小イーリアス』には、城壁の外での議論の場面も当然描かれていたであろうが⁹、プロクロスはその内容を伝えていない。B-b の話形を持つウェルギリウス『アエネーイス』では、焼却に対置される提案が断崖からの突き落としではなく海中への投げ落としになっており、さらには木馬の腹に穴をあけて中を調べるべしという新たな意見が付け加えられている¹⁰。B-b 型の変種であるクイントス・スミュルナイオスでは、シノーンの話信じようとする者たちと木馬を焼くべしというラーオコオーンの考えに同調する懐疑派とが対立するが、後者の中に意見の齟齬は見られない¹¹。これらに対してトリピオドーロスの話形は B-a である¹²。

a と b の話形の相違が、AB いずれの系統もさらに二つの流派に分かれていたことに起因するのか、詩人による伝承の改変の結果なのかは定かではないが、いずれにせよこの違いはさして重要ではない。むしろ木馬の安置ないし引き入れに反対する一派の中に、その破壊の方法をめぐるとこのような意見の対立が見られること、そして、ab いずれの話形においても断崖からの突き落としという方法が一方の側から提案されていることにこそ注目すべきである。この点に関して Hainsworth は、そもそもトロイアに断崖と呼べる場所があったらどうかと疑義を呈する¹³。『イーリアス』にそのような言及はいっさい見当たらないし、ヒサルリク丘の北側斜面が急勾配をなすとはいえ、これを指して断崖と称したとは考え難く、それゆえ古注家らは『オデュッセイア』の問題の詩句(8. 508: *κατὰ πετράων βαλέειν ἐρύσαντας ἐπ' ἄκρης*) を「城壁から」投げ落とすという意味に解しようとしたのだと¹⁴。そして、*κατὰ πετράων* という表現は木馬を投げ落とすという文脈から自然な連想によって生まれたものであって、実在する崖ないし岩壁が詩人の念頭にあったわけではないと結論づける。

木馬の処置の仕方をめぐるとロイア人の議論の中で断崖からの突き落としが

提案されるという話は、トロイアの城壁の周囲にそのような場所が実際に存在したことを前提とするものではないという Hainsworth の考えはおそらく正しい。だが、その由って来るところについては別様の説明が可能であるように思われる。そのためにはまず、崖から突き落とすという行為の持つ特別な意味を明らかにしておかなければならない。

ブルータルコスがデルポイで起こったこととして伝えているところによると、オルシラーオスはクラテースの娘を娶ることになっていたが、婚約を交わして献酒の儀を執り行っている最中に混酒器が独りで真ん中から割れるという変事が生じた。これを凶兆と見たオルシラーオスは花嫁を後に残して父親とともにその場を立ち去った。数日後、クラテースはオルシラーオスたちが犠牲を捧げている間に密かに黄金の聖財を彼らの持ち物の中に紛れ込ませておいた。そのためオルシラーオスとその兄弟は裁きの場で申し開きをする機会すら与えられずに崖から突き落とされた¹⁵。

アイリアーノスもこれと同主旨の話の伝えている——「デルポイで供物を捧げようとしている者たちがいた。デルポイの住民たちが彼らに善からぬ企みをめぐらし、彼らが香や神饌用の菓子を含めていた籠に、聖器のいくつかを秘かに入れておいた。そうしてから彼らを捕え、神殿荒らしの罪人として岩壁の上に曳きたて、デルポイの掟に従って突き落とした¹⁶」（松平千秋訳）。

また『アイソーポス伝』では、この伝記の主人公にさんざん侮辱され、他国の人々に自分たちの悪口を言い触らされることを恐れたデルポイ人が、アポローンの神殿から持ち出した黄金の酒杯をアイソーポスの寝具の中に隠し、彼に聖財窃取の濡れ衣を着せて断崖から突き落とす¹⁷。Wiechers はこの話の中にデルポイのタルゲーリア祭の縁起譚を見出そうとした¹⁸。すなわち、彼の地においてはバルマコスとして選定した人物を市民全員で行列をなして崖の縁まで引き立て、そこから突き落とすことによって罪穢れを祓うのが習わしであったが、その淵源はかつて（おそらくは何らかの災いに見舞われたときに）異国からやって来た身分卑賤で醜怪極まりない容貌の持ち主である男に神殿荒らしの罪を着せ、これを崖から突き落とすという厄払いをしたという故事にあるのだと。デルポイ人はバルマコスとすべきターゲット（上に引いたブルータルコスとアイリアーノスの証言から推測するに、一度に複数人間を選ぶこともあったかもしれない）を聖物窃盗犯に仕立て上げ、これを処刑するという形をとることによって良心の呵責を軽減しようとしたようである。

スケープゴート儀礼が高所からの突き落とすという形を取る例は他にもある。

レウカス島では毎年、アポッローンのための供犠を行う祭儀の折り、厄除けのために罪人が一人岩壁の望楼から投げ落とされた。罪人の体には落下の際の重力を減じて速度を弱めるため、ありとあらゆる種類の羽根や鳥が結わえ付けられた。崖下では小舟に乗った大勢の人々が輪になって待ち構えており、罪人を舟に引き上げると全力を尽くして彼を国境の外へ運び、命を助けてやった¹⁹。

このレウカス島の儀礼に関する証言の中には、スケープゴートとなる人（たち）が自らその役を買って出て自発的に崖から飛び降りたということを示すものもあるが²⁰、かかる証言内容の食い違いが何に起因するのかを詮索してもあまり意味はなかろう。ここでは儀礼としての自発的な飛び降りの類例としてヒュペルボレオイ人の慣習を挙げるにとどめたい。アポッローンの崇拜者として知られるこの民族は、人生を十二分に堪能したと思えるほどの年齢に達すると嬉々として頭に花冠を戴き、定められた断崖から我とわが身を躍らせて海中に飛び込むという²¹。これが単なる自殺でないことは、死を前にしての盛装と身投げのための特定の場所の存在という二点から明らかである。

上に示したいずれの例においてもスケープゴートとして崖から突き落とされる（飛び降りる）のは人間であるが、動物を用いた同様の儀礼については次の事例が傍証となるかもしれない。それは「スケープゴート」という語の由来でもある旧約聖書『レビ記』第16章の贖罪の日に関する規定である。——祭司は二匹の雄山羊を受け取ると、それらをヤハウエの前に立たせて籤を引き、ヤハウエのための雄山羊と「アザゼルのための」それとを決める。前者は浄罪の供犠として神に捧げ、後者は荒野の「アザゼルのもとに」送り出すために生きたまま立たせておく。そして祭司はこの雄山羊の頭に両手を押しつけ、イスラエルの民のすべての罪を告白する。雄山羊はあらゆる罪責を自らの身に負って係の者の手で荒野へと送り出される。この者は自分の着物を洗い、体を水で浄めた後でなければ宿営に入ることを許されない²²。Driverによれば、古来謎とされてきた「アザゼル」という語の原義は「険しい岩場、断崖」であるという。荒野に送り出された雄山羊は「崖の上に立ち」、「嵐の霊によって」追い立てられて死ぬ²³。また、ユダヤ教の口伝律法集である『ミシュナ』の伝承では、「アザゼルのための」雄山羊の角には深紅の糸が巻かれ、その糸が断ち切られるや、雄山羊はただちに峡谷の下に投げ落とされる²⁴。

以上の諸例から、断崖からの突き落としという行為には、その対象とともにそれに転移された罪や穢れや災いを祓い棄てる効果があると信じられていたことが明らかになった。筆者は、木馬の処置の仕方をめぐるトロイア人の議論の

中でこの方法が提案されるのも、そのような儀礼の名残ではないかと考えたいのである。つまり、何らかの災厄に見舞われて危機的状況に陥ったときに、あるいは不知不識のうちに身につけてしまったかもしれない罪や穢れを祓って災厄を未然に防ぎたいときに、馬などの獣にそれらを転移させ、高所から突き落とすことによって不安を解消しようとする儀礼が古い時代には存在したのではないかと。そして戦争の際には穢れや災いを担わせた獣を敵陣に向けて放ち、いわば一石二鳥の効果を得ようとする儀礼、クリューサメーがクノーポスのために行い、ヒッタイト人や古代インド人にも知られていたあの儀礼が行われていたのである。敵軍の方からやって来た獣が自軍の陣中へ逃げ込んだ場合は、予言者がそれを災いをもたらす穢れた獣だと判断すればただちに断崖から投げ落とされたであろう。逆に、そうとも知らずこれを神々への犠牲に供せんとて屠ろうものなら、全軍が壊滅的打撃を蒙ることになったであろう。

このように考えるならば、木馬の安置ないし城塞内への引き入れに反対する人々の間で、その処分の方法に関して意見の対立が生じている理由も自ずと明らかになる。断崖からの突き落としに對置された斧で断ち割るとか焼き払うとかいうやり方は、敵の手によって送り込まれた獣を屠殺して供犠を行うことを意味している。木馬に槍を投げつけ、その腹に突き刺したラーオコオンが悲惨な死を遂げたのも無理からぬことであった²⁵。「トロイアの聖なる城市を滅ぼした²⁶」と言われるオデュッセウスが馬の姿に変身し、しかも槍で突かれて（ただし、これは息子のテーレゴノスによってであるが）死ぬという話も実に示唆的である²⁷。木馬を城内に安置する（引き入れる）という選択肢は、災いを背負った「槍の馬」が腹の中に兵士を積み込んだ「木馬」へと変容するのに伴って新たに生み出され、刃物による破壊または焼却に取って代わってトロイアに破滅をもたらすという役割を果たすことになったのである。

III

災いを転移されたスケープゴートたる生きた馬が身中に兵士を潜ませた巨大な木馬へと変容する過程においては、夙に指摘されているように²⁸、中に兵士を隠した巨大な袋または甕を運び込むという策略を用いてエジプトがヨッパを攻略した話²⁹、あるいはその類話が利用されたであろうことは疑うべくもない。だが、何か別の要素もここに加わっているとは考えられないだろうか。

人間が中に入っている人工の馬というモチーフを持つ話として、トロイアの

木馬のそれに次いでよく知られているのは、プラトーン『国家』の中でグラウコーンが語る、リュウディアの人ギュゲースの物語である。——ギュゲースは王に仕える羊飼いであったが、ある日、大雨と地震の後で大地に生じた裂け目の中に入って行き、そこに中が空洞になっている青銅製の馬を見つけた。馬の中には巨大な屍体が横たわっており、その指には黄金の指輪がはまっていた。その指輪を抜き取って自分の指にはめたギュゲースは、それをしかるべく操作すれば自分の姿を消すことが出来るということに気づいた。そこで彼は王の許へ向かう使者の中に加えてもらい、王妃と通じた後、妃と共謀して王を殺し、王権を我が物とした³⁰。

Hanfmann は青銅の馬に乗った姿で表現される神を祀るヒッタイトの儀礼にこの物語との類似性を見出し、それがトロイアの木馬の物語の成立に寄与したかもしれないと言うが³¹、筆者はこの物語をローマのフォルムにあった「クルティウスの池」にまつわる伝説の一つと結びつけて考えたい。——前 362 年、フォルムの中央付近が陥没し、大きな深い穴が生じた。神託はローマの国家が永遠たることを望むなら、ローマ市民をして最も力を発揮せしめうるものをおかの場所に奉納せよと命じていた。するとマールクス・クルティウスという戦に長けた若者が、それは武具と勇気にほかならぬと説き、贅の限りを尽くして飾り立てた馬に武装した姿で乗ったまま、穴の中に飛び込んだ³²。

大地に生じた穴、人馬一体というギュゲースの物語と共通のモチーフがここには認められるが、そこから一歩進んで次のように考えるのは些か強引に過ぎようか。この話は毎年 5 月 14 日に 27 体の藁人形を捧げ物としてティベリス川に投げ込む「アルゲイの供犠³³」に類似した何らかの儀礼の縁起譚が下敷きになっているのではないかと。穢れや災いを転移させた人形を中が空洞になっている馬形の中に入れ、それを池や湖、あるいは大地に生じた穴や裂け目に投げ入れて浄めとするスケープゴート儀礼がかつて存在したとしたらどうだろうか。しかもオウィディウスがアルゲイの供犠についてはっきり述べているように、その儀礼も元は人身御供、すなわち災厄を一身に背負った人間のスケープゴートを馬形の中に閉じ込め、それを池沼に沈めたり深淵に投げ込んだりするという形で行われるものであったとしたら、それがギュゲースの物語とトロイアの木馬の物語の両方に「それを利用することによって敵に災いをもたすことのできる邪悪な力を持つ、人造の馬の体内に隠された人間」というモチーフを提供したと考えることも不可能ではないだろう。

¹ C. A. Faraone, *Talismans and Trojan Horses: Guardian Statues in Ancient Greek Myth and Ritual*, New York / Oxford 1992, 94 にはセルウィウス以来の学説史が簡潔にまとめられている。Faraone 自身は、トロイアの木馬は馬を模った攻城用装置を詩的に表現したものでなければ、馬が重要な役割を演ずる何らかの神話ないし儀礼が合理化されたものでなく、ウエルギリウスが『アエネーイス』第2歌で語っているとおりのも、すなわち、これはオデュッセウスとディオメデースが盗み出したパッラディオンの代償としての女神アテーナーへの奉納物であり、トロイアの城内に安置すれば人民を守護し戦勝をもたらすだろうと言って敵を欺くため、ギリシア人が造った巨大な馬の木像だと考えている。

² W. Burkert, *Structure and History in Greek Myth and Ritual*, Berkeley / Los Angeles / London 1982 (1979), 59-62.

³ Polyae. 8. 43.

⁴ Faraone, *op. cit.*, 41, 109 n. 38 は、イスラエルから戦利品として「神の箱」を持ち帰ったために腫れ物に苛まれたペリシテ人が、祭司たちと占い師たちの指示どおりにヤハウエに対する償いの捧げ物として黄金の腫れ物の模型と黄金の鼠の像をペリシテの領主の数に合わせて五つずつ作り、それらを「神の箱」とともに二頭の乳牛の引く車に載せて送り出したところ、牛は車をイスラエルの町ベト・シメシユまで引いて行き、そこで止まったという話（『サムエル記』上 5:6-6:14）の根底をなしているのも、このタイプの儀礼であると考えられる。

⁵ *δουράτεος ἵππος* (*Od.* 8. 492f., 512).

⁶ *Od.* 8. 507f.: ἡ δὲ διαπλήξαι κούλον δόρυ νηλέϊ χαλκῶ, / ἢ κατὰ πετράων βαλέειν ἐρύσαντας ἐπ' ἄκρης.

⁷ M. Davies (ed.), *Epicorum Graecorum Fragmenta*, Göttingen 1988, 62, 4f.: καὶ τοῖς μὲν δοκεῖ κατακρημνίσαι ἀντόν, τοῖς δὲ καταφλέγειν. 『イーリオスの陥落』の語形 A-b は *Apollod. Epit.* 5. 16f. の内容と一致する。

⁸ Davies, *op. cit.*, 53, 28-30.

⁹ 岡道男『ホメロスにおける伝統の継承と創造』創文社 1988, 299.

¹⁰ *Aen.* 2. 36-38: aut pelago Danaum insidias suspectaque dona / praecipitare iubent subiectisque urere flammis, / aut terebrare cavas uteri et temptare latebras. Austin (ad *Aen.* 2. 36) は、ウエルギリウスは木馬の処置の仕方をめぐるとロイア人の議論が木馬を城内に引き入れる前に行われたことにしたためにホメロスの *κατὰ πετράων βαλέειν* を *pelago praecipitare* に変える必要に迫られたのだと言うが、同じ B の流れを汲むトリピオドーロスはそのような改変を行っていない。

¹¹ Quint. Smyrn. 12. 389-394.

¹² Triph. 253f.: ἦβελον ἢ δολιχοῖσιν ἐπὶ κρημνοῖσιν ἀράξαι / ἢ καὶ ἀμφιτόμοισι διαρρήξαι πελέκεσσιν.

¹³ J. B. Hainsworth ad *Od.* 8. 508 (A. Heubeck, S. West and J. B. Hainsworth (edd.), *A Commentary on Homer's Odyssey*, vol. 1: *Introduction and Books I-VIII*, Oxford 1988, 380).

¹⁴ *ἐπ' ἄκρης* を schol. B は *ἐπὶ κρημνῶν, ἢ ἐπὶ τῆς ἀκροπόλεως* と、エウスタティオスは *ἐπὶ τίνος ἄκρου τοῦ τείχους* と、それぞれパラフレーズしている。

¹⁵ *Prae. ger. reip.* 825b. cf. Arist. *Pol.* 1303b37-1304a4.

¹⁶ *VH* 11. 5.

¹⁷ *W* 127-142, cf. *Plut. De sera* 557a. *G* 142 では崖の縁に立たされたアイソーポスが自ら身を投げることになっている (ἔρριψεν ἑαυτὸν ἀπὸ τοῦ κρηνοῦ κάτω).

¹⁸ A. Wiechers, *Aesop in Delphi*, Meisenheim am Glan 1961, 31-42. 中務哲郎『イソップ寓話の世界』ちくま新書 1996, 87-89 も参照。

¹⁹ *Strab.* 10. 2. 9. cf. *Ov. Fast.* 630, *Tr.* 5. 2. 76. *Ps.-Ammon.* 494 は *φαρμακός* を ‘ὁ ἐπὶ καθάρσει τῆς πόλεως ῥιπτόμενος’ と定義している。分詞を修飾する何らかの前置詞句が欠けていると思われるが、これは D. D. Hughes, *Human Sacrifice in Ancient Greece*, London / New York 1991, 154 の言うようにレウカス島の儀礼に言及したもののかもしれない。

²⁰ *Ael. NA* 11. 8: ἐν δὲ τῇ Λευκάδι ἄκρα μὲν ἐστὶν ὑψηλή, νεὼς δὲ Ἀπόλλωνι ἔδρυται, καὶ Ἄκτιόν γε αὐτὸν οἱ τιμῶντες ὀνομάζουσιν. οὐκοῦν τῆς πανηγύρεως ἐπιδημεῖν μελλούσης, καθ’ ἣν καὶ τὸ πῆδῆμα πηδῶσι τῷ θεῷ; *Phot.* s. v. *Λευκάτης*: σκόπελος τῆς ἠπείρου· ἀφ’ οὗ ῥίπτουσιν αὐτοὺς εἰς τὸ πέλαγος οἱ ἱερεῖς; *Serv. ad Verg. Aen.* 3. 279: nunc auctorare se quotannis solent qui de eo monte iaciantur in pelagus; *Amp.* 8. 4: in summo monte fanum est, ubi sacra fiunt. et cum homo inde desiluit, statim excipitur lintribus.

²¹ *Pompon. Mela* 3. 37.

²² 6-10, 20-22, 26.

²³ G. R. Driver, “Three Technical Terms in the Pentateuch”, *Journal of Semitic Studies* 1 (1956), 97f.

²⁴ *Burkert, op. cit.*, 64.

²⁵ *Aen.* 2. 50-53, 229-231.

²⁶ *Od.* 1. 2, cf. 22. 230.

²⁷ W. Burkert, *Homo Necans: The Anthropology of Ancient Greek Sacrificial Ritual and Myth*, tr. by P. Bing, Berkeley / Los Angeles / London 1983, 159.

²⁸ M. P. Nilsson, *Homer and Mycenae*, Philadelphia 1972 (1933), 256.

²⁹ J. B. Pritchard (ed.), *Ancient Near Eastern Texts Relating to the Old Testament*, Princeton 1969³, 22f.

³⁰ 359D-360B.

³¹ G. M. A. Hanfmann, “Lydiaka”, *HSCP* 63 (1958), 76-79.

³² *Liv.* 7. 6. 1-5, cf. *Varro, Ling.* 5. 148.

³³ *Ov. Fast.* 5. 621ff.